

『英和对訳袖珍辞書』の改正増補版(1866)をめぐって

浦田 和幸

はじめに

1. 『英和对訳袖珍辞書』の再版
 2. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と他の辞書との比較
 - 2.1. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と現代の英和辞書との比較
 - 2.2. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と当時の英語辞書との比較
 3. 『英和对訳袖珍辞書』: 初版から再版への改訂
- おわりに

はじめに

『英和对訳袖珍辞書』は、文久2年(1862年)に、当時、江戸幕府の洋学研究・教育機関であった洋書調所から、日本で初めて刊行された本格的な英和辞書である。編集主幹の堀達之助(1823-1894)は長崎のオランダ通詞出身で、安政6年(1859年)12月に蕃書調所の翻訳方となり、万延元年(1860年)11月(または12月)に教授手伝、文久元年(1861年)8月には英字書成業の章典を受け、文久2年(1862年)11月に『英和对訳袖珍辞書』の初版が刊行されたのであった。(堀は文久3年(1863年)に開成所教授職、慶応元年(1865年)には開成所教授職のまま、箱館奉行通詞発令、箱館赴任。なお、蕃書調所は安政3年(1856年)に設立(翌年に開校)、その後、文久2年(1862年)に洋書調所、文久3年(1863年)に開成所と改称された。)¹⁾

『英和对訳袖珍辞書』(英語名:*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* [sic.]) は、ピカルト(H. Picard)の英蘭・蘭英辞書(*A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*)の英蘭部を底本として編まれたものである。²⁾ 単純化して言えば、この英蘭辞書の英語の見出し語を取り上げ、それに対応するオランダ語を日本語に置き換えることが出発点になったと考えられる。実際には、他の英蘭辞書・蘭蘭辞書も利用されたり、また、英華辞書も参照されたことなどが従来の研究で指摘されており、事はそれほど単純ではないが、いずれにせよ、開国後、英語の必要性が急激に高まった状況のなかで、従来の蘭学の伝統を活かしつつ、オランダ語を介して英語の語彙を日本語に訳そうとした努力の様子がうかがえる。まさに、『英和对訳袖珍辞書』の初版は、蘭学から英学に転換する時期の産物であったと言ってよい。³⁾

1. 『英和对訳袖珍辞書』の再版

『英和对訳袖珍辞書』の初版は、英語の見出しと品詞表示が活版印刷で、漢字とカタカナで書かれた日本語の訳語が木版印刷であった。辞書の項目は、横書きの英語の主見出しに、英語の符合で記した品詞表示があり、日本語の訳語は縦書きで記されている。訳語の補足的説明は、訳語自体よりも小さい文字で加えられている。また、項目によっては、字下げした中見出しとして、成句などが横書きで挙げられ、それに対して日本語訳が縦書きで記されている。なお主見出しが動詞の場合は、不定形と並んで、規則変化動詞は過去形／過去分詞形と現在分詞形が、不規則変化動詞は過去形・過去分詞形・現在分詞形が付記されている（例：Love-ed-ing; Sing, sang, sung, singing）。

品詞表示の符合については、辞書本体の冒頭で「略語之解」の一覧があるが、そのうちで、今日の英語辞書では普通に用いられなくなったものとして、名詞 (*n.=noun*) に相当する *s.* (=substantive: 実名辞)、他動詞 (*u.t.=verb transitive*) に相当する *u.a.* (=verb active: 他動辞)、自動詞 (*u.i.=verb intransitive*) に相当する *u.n.* (=verb neuter: 自動辞) が目を引くが、他はほぼ自明である。

初版刊行後、ほぼ3年後の慶応2年（1866年）1月に『改正増補 英和对訳袖珍辞書』として、再版の第1刷が開成所から出版された。再版の編集主幹は堀越亀之助で、博物学や度量衡の用語の面では柳川俊三や田中芳男らの専門家の協力を得たと再版前書きに述べられている。（小論の末尾に、再版のタイトルページと見本ページの画像を掲載する。）

小論では、初版から再版への改訂の状況を実証する試みとして、初版の辞書本体のアルファベット項のうち、B, G, O, T のそれぞれ最初の250の主見出し項目を対象として、計1000の主見出し項目を再版1刷と比較して、異同を調査した。

初版は英語を知ることが急務とされた社会的状況のなかで、万難を排して完成されたものと想像される。刊本として日本初の英和辞書を生み出したこと自体が偉業であるが、どの辞書についても言えるように、不備があったことは否めない。基本的には英蘭辞書を介して編まれた英和辞書であり、当然ながらそれに起因する制約が想定され、総じて、蘭学のなかでの英学の成果であったという見方をすることもできよう。ところが、小論で後に見るように、再版では初版という土台の上に立ちながらも、英英辞書から直接に知見を取り入れつつ適宜修正して、大きく英学独自の方向に乗り出して行った様子がうかがえる。

以下、まずは、改訂の結果としての再版の収録語彙や収録語義の特徴を知るために、抽出調査の対象とした上記1000項目の範囲で、通時的な観点から現代の英和辞書との比較、また、共時的な観点から当時の一般的な英語辞書（＝英英辞書、つまり、英米で用いられる英語の国語辞書）と比較することにする。その後に、1000項目に関して、初版から再版への改訂状況

を検討する。

2. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と他の辞書との比較

『英和对訳袖珍辞書』のページを繰ると、今日の目からすれば馴染のない語や語義に出くわすことがしばしばある。底本の英蘭・蘭英辞書自体がポケット判の辞書であるように、本辞書も収録内容の点ではポケット辞書に相当するので、過度に特殊な語は収録していないはずである。まずは、今日の英和辞書と比較して、再版の『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に含まれる見出し語や語義が、どの程度、今日の辞書に見られるのかを調査する。次に、本書が当時の英語をどの程度反映していたかの一つの指標として、見出し語と語義を当時のウェブスター系の英語辞書 (= 英英辞書) を例にとって比較調査する。

2. 1. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と現代の英和辞書との比較

今日の中辞典クラスの英和辞書として『研究社 新英和中辞典 第 7 版』(2003) を例にして、小論で調査対象とした 1000 項目の主見出し語が収録されているかどうかを調べた。

『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と現代の一般的な英和辞書とでは見出しの立て方が異なる面があるため、同列に論ずることはできないが、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の B 項の主見出し 250 のうち 33 項目、G 項の主見出し 250 のうち 32 項目、O 項の主見出し 250 のうち 58 項目、T 項の主見出し 250 のうち 60 項目、つまり、合計で 1000 項目のうち 183 項目は『研究社 新英和中辞典 第 7 版』に見出し語としての収録がなかった。2 割弱であるが、これらの語は今日の英語では全く用いられないか、用いられたとしても頻度が低い語と考えられる。今日、我々が『英和对訳袖珍辞書』の初版や再版を見た時に少なからず違和感を覚えるのは、これらの語の存在に起因するところが大きいと言えよう。しかし、言葉は常に変化するので、約 150 年前の辞書としてはやむを得ないことである。

一方、収録語数の多い大辞典クラスの英和辞書と比較すると、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』はどうであろうか。収録項目の豊富さで定評のある『リーダーズ英和辞典 第 3 版』(2012) で調べると、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の B 項の主見出し 250 のうち 13 項目、G 項の主見出し 250 のうち 12 項目、O 項の主見出し 250 のうち 29 項目、T 項の主見出し 250 のうち 25 項目、合計で 1000 項目のうち 79 項目は見当たらなかった。これらは全体的には 1 割以下であり、今回調査した限りでは、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の主見出し語は、現代の『リーダーズ英和辞典 第 3 版』にはほぼ収録されていることが確認できた。

語義についてはどうであろうか。収録語数が多いばかりか、語義記述の点でもかなり広い範囲で記載する『リーダーズ英和辞典 第 3 版』で、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の語義の

有無を点検した。『リーダーズ英和辞典 第3版』に見出しとして収録されている計921項目に関して調べたところ、B項の主見出し237のうち17項目、G項の主見出し238のうち11項目、O項の主見出し221のうち9項目、T項の主見出し225のうち3項目、合計で921項目のうち40項目では、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に記載された語義の全部あるいは一部が見られなかった。これらは全体的にはごく僅かであり、今回調査した限りでは、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に記された語義は、現代の『リーダーズ英和辞典 第3版』の該当項にほぼ何らかの形で記載されていることが確認できた。

2. 2. 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』と当時の英語辞書との比較

『英和对訳袖珍辞書』は、二言語辞書 (bilingual dictionary) の英蘭辞書、即ち、主にオランダ語話者のための英語辞書を底本にして編まれたものであったが、当時の英語母語話者用の一言語辞書 (monolingual dictionary) としての英語辞書 (= 英英辞書) と比べてはどうであったろうか。ここでは、試みに、ウェブスター系の簡約辞書として、1862年版の *A Dictionary of the English Language* (背文字は *Webster's English Dictionary*) を比較対象として用いた。

『改正増補 英和对訳袖珍辞書』のB項の主見出し250のうち4項目、G項の主見出し250のうち2項目、O項の主見出し250のうち2項目、T項の主見出し250のうち7項目、合計で1000項目のうち15項目は、このウェブスター系簡約辞書に該当項が見られなかった。それらの多くは、辞書によって収録方針の異なる複合語であり、従って、実質的にはほぼ全ての語が調査したウェブスター系簡約辞書に含まれていると考えてよいことになる。つまり、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の収録語は、当時の母語話者用の英語辞書と比べて、特に奇異な語を収録しているわけではないことの一つの表れである。ただし、一部には、このウェブスター系簡約辞書で「廃語」(Obsolete) というレーベルを付された語も含まれていることは注意すべきである。

最後に、語義についてはどうであろうか。このウェブスター系簡約辞書に見出しとして収録されている計985項目に関して、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の語義の有無を点検した。B項の主見出し246のうち6項目、G項の主見出し248のうち0項目、O項の主見出し248のうち4項目、T項の主見出し243のうち0項目、合計で985項目のうち10項目では、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に記載された語義の全部あるいは一部が見られなかった。これらはごく僅かであり、従って、語義の点でも、当時の母語話者用の英語辞書と比べて、不適切な記載はほぼないことが看取できた。(ただし、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に時折り見られる誤った記述については別である。)

3. 『英和对訳袖珍辞書』：初版から再版への改訂

再版では、目立つ点として、巻末に「不規則動辞表」などの付録が加わったが、小論では辞書本体の記述に着目して特徴を検討する。

初版から再版への改訂の結果、初版の B 項の主見出し 250 のうち 33 項目、G 項の主見出し 250 のうち 62 項目、O 項の主見出し 250 のうち 64 項目、T 項の主見出し 250 のうち 54 項目、つまり、合計で 1000 項目のうち 213 項目において何らかの変更がなされた。今回調査した範囲では、2 割強の項目が改訂されたことになる。改訂内容は、見出し語や変化形の語形か綴字の訂正、また、品詞の訂正が一部あり、大半は訳語の訂正に集中した。

再版への改訂作業の一つの眼目とされた博物学や度量衡に関する語の変更は、1000 項目のなかで 27 項目に見られた。⁴⁾

以下、訳語の訂正に的を絞って、いくつかのタイプに分けて紹介する。第一に、ピカルトの英蘭辞書のオランダ語の部分を読了際に生じたと思われる初版の誤りとその訂正の例を示す。(以下、一覧表の中では、当時の英語辞書 (= 英英辞書) における語義記述の例として、ウェブスター系の簡約辞書 (1862 年版) の定義の関連箇所を参考として挙げる。ピカルトの辞書のオランダ語の部分には、括弧内に筆者による英語の注を付す。また、訳語を比較する際に、特に注目すべき箇所には適宜下線を施す。なお、『英和对訳袖珍辞書』においては、訳語の補足的説明は訳語自体よりも小さい文字で記されているが、ここでは便宜上、括弧書きで示すことにする。漢字字体は原則として現代当用漢字に統一した。)

見出し	Picard1857	袖珍初版	袖珍再版	Cf. Webster1862
Baize	s. <i>baai</i> , f. ('bay; baize, flannel')	s. 港	s. 毛織物ノ名	n. A coarse woolen stuff, with a long nap.
Gastronomy	s. <i>kunst, zucht om lekker te eten</i> , f. ('art, desire to eat delicious(ly))	s. 術. 美食 好ミ	s. <u>食養生術</u> . 美食好ミ	n. The art or science of good eating.

ピカルトの英蘭部では **Baize** に対して '*baai*' というオランダ語をあてているが、逆に蘭英部で **Baai** というオランダ語を引くと '*bay; baize, flannel*' という英語が与えられている。つまり、'*baai*' というオランダ語には二義あり、初版では不適切な方の語義で理解した結果、**Baize** を「港」と誤訳したのであろう。これは、ピカルトの英蘭部に準拠して、オランダ語を介しつつ英単語の語義を理解しようとする際に生じる誤りである。再版では英英辞書も参考にしたのであろうか、「毛織物ノ名」という訳語に訂正された。(ちなみに、『和蘭字彙』では '*baai*' というオランダ語に二つの見出しを立て、一方は「トロメンノ類 (下品ノモニテ織リタル目ノアラキ織

物ナリ)」とし、他方は「内海」としている。）

Gastronomy では、初版の「術」という訳語が一見して気になる。ピカルトのオランダ語訳では、'kunst' と 'zucht' の両方に後ろの不定詞句がかかると思われるが、kunst だけを独立に取り上げて訳したために生じた誤りである。再版では訂正された。

第二に、初版ではピカルトのオランダ語訳に基づく訳語を載せたが、再版ではより適切な訳語に変更された例を挙げる。

見出し	Picard1857	袖珍初版	袖珍再版	Cf. Webster1862
Gabardine	<i>s. regenmantel, m.</i> (‘raincoat’)	s. 雨合羽	s. 上衣	<i>n.</i> A coarse frock or loose upper garment; a mean dress.
Gaff	<i>s. ijzeren haak, m.</i> (‘iron hook’)	s. 鉄ノ鉤	s. 銚 <small>モリ</small> （魚ヲツク）	<i>n.</i> A light spear used by fishermen.
Gemmeous	<i>adj. van diamant, -achtig.</i> (‘of diamond, diamond-like’)	s. 金剛石ノ. 金剛石様ノ	s. 宝石ノ. 宝石様ノ	<i>a.</i> Pertaining to gems, of the nature of gems; resembling gems.
Odontalgic	<i>adj. tandpijn stillend</i> (‘toothache-soothing’)	<i>adj.</i> 齒ノ痛 ミヲ和ゲル	<i>adj.</i> 齒ノ痛 ミノ	<i>a.</i> pertaining to the toothache
Tag-rag	<i>adj. gescheurd</i> (‘torn, burst’)	<i>adj.</i> 破裂シ タル	<i>s. et adj.</i> 下 賤ノ者ノ	<i>n. or a.</i> A term applied to the lowest class of people.

Gabardine は、初版ではピカルトのオランダ語に倣って「雨合羽」であったが、再版では「上衣」に訂正された。ウェブスター系辞書の定義と比べるとやや正確さに欠けるが、初版からすれば大きな進歩である。

Gaff は、初版ではピカルトのオランダ語の直訳であったが、再版では的確な訳語となり、参考として挙げたウェブスター系辞書の定義と比べて遜色ない。

Gemmeous は、初版ではオランダ語の直訳であったが、再版では「金剛石 (diamant)」を「宝石」に変えて、よりの確な訳語になった。

Odontalgic は、初版ではピカルトのオランダ語に合わせて「齒ノ痛ミヲ和ゲル」としていたが、これは誤りであろう。「和ゲル」は不要で、再版の訳語の「齒ノ痛ミノ」が正しい。⁵⁾

Tag-rag は、初版ではピカルトのオランダ語に合わせた訳語になっているが、再版では品詞として *s* (substantive 実名辞) (=名詞) も加わり、全く異なる語義になった。品詞と語義の点で、ウェブスター系辞書の記述に酷似している。ウェブスター系辞書のどの版を参照したかの確証はないが、恐らく、初版から再版への改訂の際には、随時見比べて、初版の訳語を点検してい

たのではないかと推測される。

第三に、初版ではピカルトの英蘭辞書から得られたオランダ語に対して和蘭字彙の訳語をあてたが、再版では何らかの英英辞書を参考にして変更したと思われる例を挙げる。

見出し	Picard / 和蘭字彙	袖珍初版	袖珍再版	Cf. Webster1862
Gag	s. <i>prop</i> , f. / 口木 又 栓ノ類	s. 口木. 栓ノ類	s. 猿轡ノ類	n. Something thrust into the mouth and throat to hinder speaking.
Gateway	s. <i>poort</i> , <i>koets</i> f. / 門; 輪ノ四ツアリテ屋根ノアル乗車	s. 門. 乗車 (輪ノ四ツアリテ屋根ノアル)	s. 門. 路	n. 1. <u>A way through the gate of some inclosure.</u> 2. A gate or entrance itself.
Gaud	s. <i>beuzelarij</i> , f. / 軽口 又 バカラシキ事	s. 軽口. 馬鹿ラシキコト	s. 飾リ	n. An ornament; something worn for adorning the person; a fine thing.
Geology	s. <i>aardbeschrijving</i> , <i>geologie</i> , f. / 風土記 * 『和蘭字彙』には <i>geologie</i> の項なし	s. 風土記	s. 地質学	n. The science which treats of the structure and mineral constitution of the globe, and of the causes of its physical features.
Talon	s. <i>klaauw</i> , m. / 指 又 爪 (鳥獸等ノ)	鳥獸ノ爪	鳥ノ爪	The claw <u>of a fowl</u> .

Gag は、初版では『和蘭字彙』の訳語の引き写しであったが、再版では恐らく英英辞書の定義を参考にして、よりの確な訳語に変更したと考えられる。

Gateway は、初版の 2 番目の訳語はかなり特殊であり、『和蘭字彙』の影響が強く感じられる。ところが、再版ではこの訳語は削除され、代わりに、今でも一般的な語義が与えられた。

Gaud では、『和蘭字彙』から引いたと思われる初版の訳語は、再版では全く別の訳語に変更になった。ウェブスター系辞書の定義と軌を一にしている。

Geology は、『和蘭字彙』に基づくと思われる「風土記」から「地質学」へと、現代も通用する新しい訳語に変わった。

Talon は、初版では 'klaauw' というオランダ語の意味に倣って、「鳥獸ノ」という限定があったが、再版ではより狭く「鳥ノ」という限定に変更された。ウェブスター系辞書の定義と合致している。

第四に、ピカルトのオランダ語に基づく初版の訳語の一部が、再版で削除された例を見ておこう。

見出し	Picard	袖珍初版	袖珍再版	Cf. Webster1862
Garble	<i>verminken, besnoeijen</i> (to mutilate; cut)	<i>v.a.</i> 剪ル. 選ミ出ス. <u>不具ニ為ス</u> (<u>躰ヲ</u>)	<i>v.a.</i> 剪ル. 選ミ出ス.	「不具ニ為ス」に相当する語義なし
Obstupefaction	<i>s. verdooving, verstomming, verbaasdheid, f.</i> (‘stupefaction; silencing; astonishment’)	<i>s.</i> 鈍ラスコト. <u>黙ラスコト.</u> 驚クコト	<i>s.</i> 鈍ラスコト	「黙ラスコト. 驚クコト」に相当する語義なし

Garble, Obstupefaction の両語とも、下線を引いた初版の訳語はピカルトの英蘭辞書に基づくものであるが、再版では削除された。いずれの場合も、参考として挙げたウェスター系辞書には該当の語義は見られなかった。

Garble に関して、ピカルトが挙げる ‘verminken’ というオランダ語は『和蘭字彙』では「不具ニナス (躰ヲ)」と訳されており、初版はこれを引き写したと思われる。

Obstupefaction に関して、ピカルトが挙げるオランダ語のうち、‘verbaasdheid’ は『和蘭字彙』では「驚ク事」と訳されており、初版の訳語の一部はこれと一致する。一方、‘verstomming’ は、『和蘭字彙』には見出しがない。(なお、派生元の動詞の ‘verstommen’ を見ると、『和蘭字彙』では「閉口サスル」と「トボケテダマル」という訳語があてられている。)

最後に、初版からかなり変更され、より明確になった再版の訳語が、ウェブスター系辞書の影響を受けているのではないかと推測できる例を挙げる。

見出し	袖珍初版	袖珍再版	Cf. Webster1862
Georgic	<i>s.</i> 国俗ノ詩ノ類	<i>s.</i> 耕作ノ術ヲ書タル詩	<i>n.</i> <u>A rural poem; a poetical composition on the subject of husbandry, containing rules for cultivating lands, in a poetical dress.</u>
Gerund	<i>s.</i> 動詞ノ変化	<i>s.</i> 動詞ノ名詞 (「ラテン」ノ文法ノ語)	<i>n.</i> <u>In the Latin grammar, a kind of verbal noun, partaking of the nature of a participle.</u>
Obliquation	<i>s.</i> 斜メナル向キ. 遠ザカリ	<i>s.</i> 斜メナル向キ. <u>正道ヲハヅレルコト</u>	1. Declination from a straight line or course; a turning to one side. 2. <u>Deviation from moral rectitude.</u>

Tabellion	s. 交易等ニ拘リ タル掟書等ヲ取 調ル村役人	s. 昔「ローマ」 又「フランス」 ニテ掟書等ヲ取 調ル役名	n. A secretary or notary <u>under the Roman Empire, or in France during the old monarchy.</u>
Tablet	s. 小卓子	s. 小卓子. 平ナ ル物 (書画彫刻 等ヲナス為ノ). 四角ナル形ノ葉	n. 1. A small table or flat surface. 2. <u>Something flat on which to write, paint, draw, or engrave.</u> 3. <u>A medicine in a square form.</u>

Georgic, Gerund, Obliquation, Tabellion, Tablet とも、再版の訳語で下線を引いた箇所は、右に挙げたウェブスター系辞書の定義の下線部と酷似していることは否定できない。特に、4 番目の Tabellion では、再版の説明のうち『ローマ』又『フランス』ニテ」という部分はかなり具体的であり、また、5 番目の Tablet については、再版で三つになった訳語は、順序の点でも、内容の点でも、右の英英辞書の定義と全く同一線上にある。

以上、『英和对訳袖珍辞書』の初版と再版を比較しながら、特に訳語の面での改訂の特徴を、いくつかのタイプに分けて、具体的に検討した。初版出版から僅か 3 年ほどの隔たりであったが、再版では、初版での英語→オランダ語→日本語という関係から脱し、蘭学から英学へという転換期に英語と直接向き合って、堀達之助らの偉業であった『英和对訳袖珍辞書』を改良しようとする努力の跡が感じられた。さらに改良すべき点はあるにせよ、改訂の結果として、再版の語義記述は初版に比べてかなり精度が高まった。

おわりに

小論では、『英和对訳袖珍辞書』の再版に焦点を当てて、サンプル調査に基づいて改訂の特徴を検討した。

再版では、巻末付録は「不規則動辞表」を除いてウェブスター辞書の 1859 年版から利用されたであろうことが早川 (2001: 56-57) によって指摘されている。再版が何らかの点でウェブスター辞書の影響を受けていたことは明らかである。

ただ、ウェブスター辞書は大辞典のほかに、その系列の中小辞典が多々あり、系統が複雑である。⁹⁾ 古い時代の版は今日では利用の機会が限られるが、有難いことに、江戸幕府が所蔵していた貴重書を収蔵する葵文庫にはウェブスター系辞書が 5 冊あり、現在、そのデジタル版がインターネット上で公開されている。そのうちの 1 冊に 1862 年刊の *A Dictionary of the English Language* (背文字: *Webster's English Dictionary*) があるが、早川 (2001: 378-379) 及び早川 (2004: 70-71, 140) によると、これは 1847 年版簡約辞書をイギリスにおいて翻刻出版したものである。

ところで、『英和对訳袖珍辞書』の初版にある *Obtenebration* という語の綴字が、なぜか再版では誤って *Obtenepration* と綴られ、再版の次の第三版に相当する、所謂、薩摩辞書においては、正しい *Obtenebration* という形で記載されている。再版ではなぜ誤った変更をしたのであろうか。確たる根拠は不明であるが、試みに葵文庫所蔵の5冊のウェブスター系辞書で調べたところ、上記の1862年版においてのみ、*Obtenebration* という見出し綴りがあった。本辞書は簡約版であり、『英和对訳袖珍辞書』のようなポケット辞書レベルの辞書編纂の参考にするには、大辞典よりもむしろ便利な面があろう。小論の第3節で初版と再版の訳語の比較を行った際に *Webster1862* の語義記述を参考として挙げたが、再版で訂正された訳語を見ると、実際に利用されたのでないかという想像に駆られる。初版から再版への改訂作業が行われた時期に日本で利用された可能性のある他のウェブスター系辞書との綿密な比較が必要であるが、小論の結びとして、『英和对訳袖珍辞書』の初版から再版への改訂作業におけるウェブスター系辞書の影響を確認するとともに、ウェブスター系辞書の一つである *A Dictionary of the English Language (Webster's English Dictionary)* (1862) は唯一ではないにせよ、実際に利用された可能性がある点を指摘したい。この点を含め、『英和对訳袖珍辞書』の変遷については稿を改めてさらに論じたいと思う。

注

- 1) 堀達之助については堀（2011）を参照。洞察に富む堀達之助伝として、『英和对訳袖珍辞書』の背景を知るうえで貴重な文献。
- 2) ピカルトについては三好（2008a）を参照。
- 3) 『英和对訳袖珍辞書』の訳語については、従来より様々な研究がある。古典的大作としては、翻訳語の観点から『英和对訳袖珍辞書』の初版と再版の訳語を辞書形式に配列した杉本（1981）。最近の研究では、例えば、三好（2008b, 2011, 2012）、櫻井（2013a, 2013b, 2014）など。2007年に発見された『英和对訳袖珍辞書』の初版の草稿と改正増補版の校正原稿は、名雲（2007）および堀・三好（2010）を参照。また、それに関連する論考として堀（2007）、三好（2007）、櫻井（2007, 2011）など。英華辞書との関係に着目した呉（1988）、その方面での後の包括的な研究として遠藤（2009）は注目に値する。英語辞書学の観点から『英和对訳袖珍辞書』の特徴を論じたものとして *Kokawa et al.* (1994)。なお、『英和对訳袖珍辞書』の研究史については、遠藤（2009: 11-41）に詳しい。
- 4) 博物学や度量衡に関する語について、初版から再版への改訂の例をいくつか挙げておく。Barberry：草ノ名（未詳）→伏牛花、Barbel：河魚ノ名（未詳）→白魚、Gazel：野牛ノ一種→羚羊、Talc：土ノ名→黄雲母。Gallon：尺度ノ名→升ノ名（我二升五合許ニアタル）。ちなみに、博物学関係の語の訳語に的を絞った研究に櫻井（2002）、三好（2006）などがあり、ともに具体的かつ示唆に富む。また、高知県立牧野植物園牧野文庫調査報告の遠藤（2003）には植物学者牧野富太郎（1862-1957）の『英和对訳袖珍辞書』の利用に関する考察があり、興味深い。
- 5) 実は、ウェブスター系辞書によると、*Odontalgic* という語には形容詞と名詞で異なる意味用法があった。ところが、ピカルトの英蘭辞書では、*Odontalgic* を形容詞としてのみ挙げて「*Odontalgic, adj. tandpijn stillend.*」と記し、次項には“*Odontalgy* という別語の見出しを立てて、「*Odontalgy, s. tandmiddel.*」と記している（筆者注：*tandmiddel* ‘tooth remedy’）。『英和对訳袖珍辞書』の初版はピ

カルトに従い、この 2 語に関して、「Odontalgic, *adj.* 歯ノ痛ミヲ和ラゲル」, 「Odontalgy, *s.* 歯薬」と記載していた。再版ではウェブスター系辞書に倣ってか、Odontalgic に形容詞と名詞の両用法を認め、形容詞の方は「Odontalgic, *adj.* 歯ノ痛ミノ」と訂正、一方、名詞の方は初版見出しの Odontalgy を Odontalgic に改めて、「Odontalgic, *s.* 歯薬」に訂正した。Cf. Webster1862: “ODONTALGIC, *n.* A remedy for the toothache.”

6) ウェブスター辞書の伝統に関しては、早川 (2001, 2004, 2007) を参照。

参考文献

(1) 古辞書：

<『英和对訳袖珍辞書』>

堀達之助 1862 『英和对訳袖珍辞書』 江戸：洋書調所

複製版：『英和对訳袖珍辞書』 秀山社 1973

堀越亀之助 1866 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』 江戸：開成所

早稲田大学古典籍総合データベース 文庫 08 C0589

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

<英蘭・蘭英辞書>

Picard, H. 1857 *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*, 2nd ed., rev. and augm. by A.B.Maatjes. Zalt-Bommel: John Noman & Son.

静岡県立中央図書館デジタルライブラリー 藝文庫 AN173

<http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/contents/library/index.html>

<蘭和辞書>

桂川甫周 1855-58 『和蘭字彙』 江戸：山城屋佐兵衛

早稲田大学古典籍総合データベース 文庫 08 E0136

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

<ウェブスター系辞書>

Webster, Noah 1862 *A Dictionary of the English Language* (背文字: *Webster's English Dictionary*), London: Routledge, Warne & Routledge.

静岡県立中央図書館デジタルライブラリー 藝文庫 AE231

<http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/contents/library/index.html>

(2) 研究関係

遠藤智夫 2003 「牧野富太郎と『英和对訳袖珍辞書』」 『英学史研究』 36: 101-116.

——— 2009 『『英和对訳袖珍辞書』と近代語の成立 — 中日語彙交流の視点から —』 港の人

呉 美慧 1988 「『英和对訳袖珍辞書』の訳語に関する一考察 — メドハーストの『華英字典』との関係 —」 『国語学研究与資料』 12: 34-45.

櫻井豪人 2002 「開成所の訳語と田中芳男 — テンジクネズミ(モルモット)の訳語を手がかりに —」 『国語国文』 71.4: 1-16.

——— 2007 「『英和对訳袖珍辞書』初版および改正増補版の草稿」 『日本語の研究』 3-4: 86-93.

——— 2011 「『英和对訳袖珍辞書』初版草稿の諸相と蘭書の利用」 『日本語の研究』 7.3: 17-32.

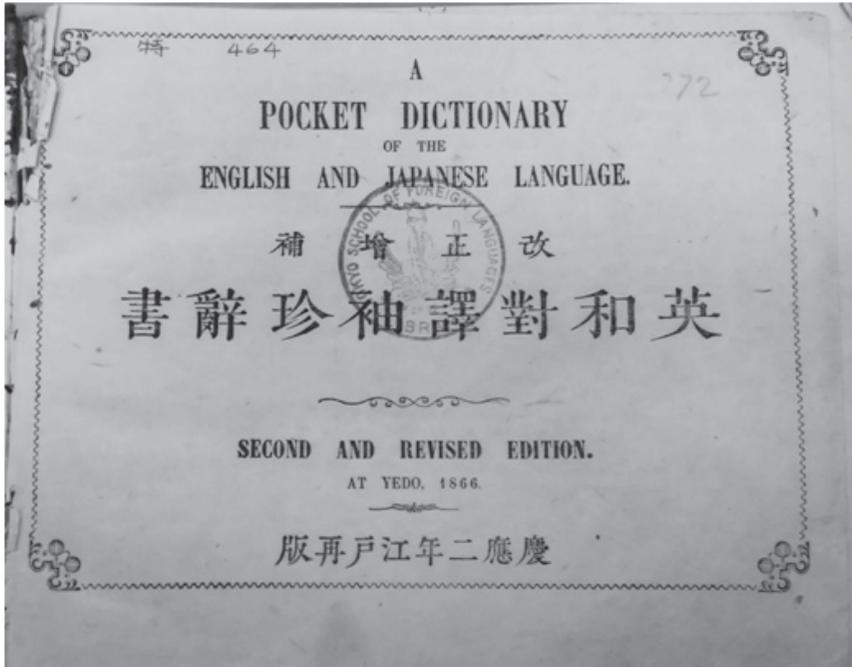
——— 2013a 「『和蘭字彙』電子テキスト化による『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語研究」 『日本語の研究』 9.3: 17-32.

——— 2013b 「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語 — その 1: Medhurst 英華字典の訳語をそのまま用いている訳語 —」 『近代語研究』 17: 35-55.

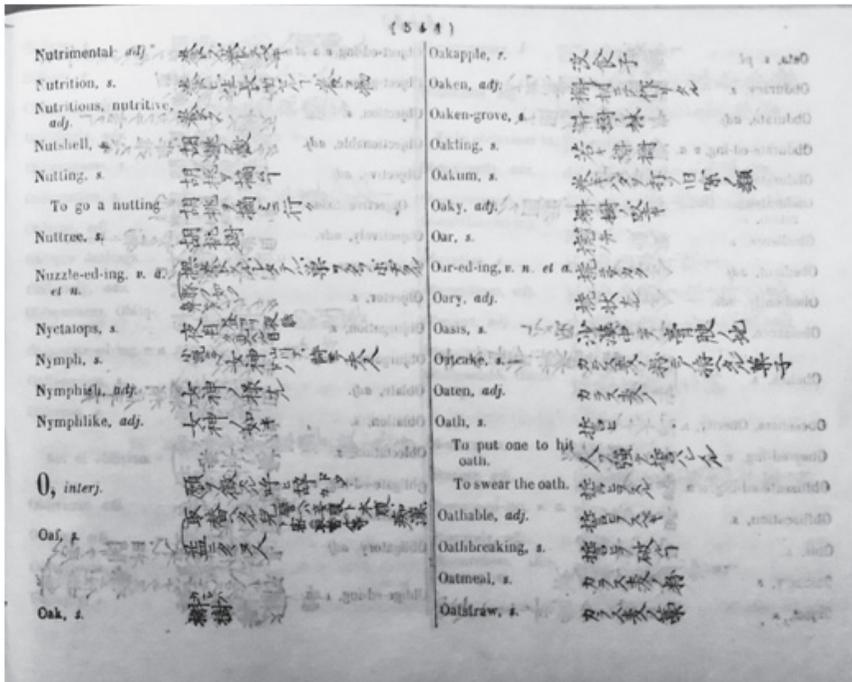
——— 2014 「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語 — その 2: Medhurst 英華

- 字典の訳語に改変を加えている訳語一」『国語語彙史の研究』33: 268-252.
- 杉本つとむ 1981 『江戸時代翻訳日本語辞典』 早稲田大学出版部
- 名雲純一 2007 『英和对訳袖珍辞書原稿影印』 名雲書店
- 早川 勇 2001 『辞書編纂のタイナミズム — ジョンソン, ウェブスターと日本 —』 辞游社
- 2004 『ウェブスター辞書の系譜』 辞游社
- 2007 『ウェブスター辞書と明治の知識人』 春風社
- 堀 孝彦 2007 「『英和对訳袖珍辞書』初版原稿, 再版校正原稿をめぐって — 開国の息遣い, まざまざと —」『英学史研究』40: 69-85.
- 2011 『開国と英和辞書 — 評伝・堀達之助』 港の人
- 堀 孝彦・三好 彰 2010 『解説『英和对訳袖珍辞書』原稿初版および再版』 港の人
- 三好 彰 2006 「『英和对訳袖珍辞書』における野鳥の訳語の考察」『英学史研究』39: 59-79.
- 2007 「新発見『英和对訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』40: 87-103.
- 2008a 「『英和对訳袖珍辞書』の底本の編纂 H. Picard」『英学史研究』41: 57-67.
- 2008b 「『英和对訳袖珍辞書』と『和蘭字彙』の関係」『日蘭学会会誌』33.1: 39-52.
- 2011 「『英和对訳袖珍辞書』の文法関係邦訳語の考察」『東京大学言語学論集』31: 101-115.
- 2012 「『英和对訳袖珍辞書』の構成法の考察」『東京大学言語学論集』32: 67-84.
- Kokawa, Takahiro *et al.* 1994. “Historical Development of English-Japanese Dictionaries in Japan (1) Tatsunosuke Hori’s *Eiwa-Taiyaku-Shuchin-jisho* (A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language [sic], 1862).” *Lexicon* 24: 80-119.

『改正増補 英和对訳袖珍辞書』 タイトルページ
(東京外国語大学附属図書館蔵本)



見本ページ (N 項の終わりに O 項の最初)



Some Notes on the Second and Revised Edition of the First English-Japanese Dictionary Published in Japan

URATA Kazuyuki

Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho (*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* [sic.]) was the first English-Japanese dictionary published in Japan. It was published in 1862, just after Japan had opened up to the West in the closing period of the Tokugawa Shogunate, when there was an urgent need to learn English, and hence to produce a dictionary for Japanese learners of the language. Its first edition was edited by Tatsunosuke Hori, a former Dutch-Japanese interpreter, then a translator/teacher of English at a governmental institute for Western learning called *Bansho-shirabesho* (later called *Yosho-shirabesho*). It was based on H. Picard's *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages* (2nd Edition, 1857). Approximately three years after its publication, in 1866, the second, revised edition of the English-Japanese dictionary was brought out by Kamenosuke Horikoshi, another Japanese teacher of English at the institute for Western learning then called *Kaiseijo*.

This paper clarifies some features of the second edition, focusing on the definitions of words, i.e. the Japanese translations of English entries. In many of its entries, the definitions were improved upon, thus shedding some influence of the English-Dutch Dictionary and probably referring to English monolingual dictionaries which were available, though in very limited numbers, in Japan at the time. This paper points out the possibility of an abridged version of a Webster's dictionary, i.e. *Webster's English Dictionary* (1862), being used in the process of revising some deficiencies of the definitions provided in the first edition, thereby contributing to the improvement of the Japanese translations of English entries in the new edition.